

## 原著論文

# コロナ禍における臨地実習で看護学生が患者との コミュニケーションで感じた困難と工夫 —マスク着用とフィジカルディスタンスの影響から—

池田瑠海<sup>1\*</sup>, 今井咲希<sup>2\*</sup>, 岸凜太郎<sup>3\*</sup>, 中嶋知世<sup>4</sup>, 石川倫子<sup>4§</sup>

## 要 旨

本研究の目的は、コロナ禍における臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難と工夫を明らかにすることである。2020年度の領域別実習後の看護学生を対象に Web での無記名自記式質問調査を行った。回収率は 55/81 名 (67.9%)、有効回答は 54 名であった。最も困難な項目は「身体に触れることにより患者の注目を引き付ける」であった。臨地実習の経験回数が 5 回群よりも 2 回群で困難を感じた項目は 13 項目中 12 項目であった。工夫は〔患者の意思・心理を理解するための工夫〕で【患者の言葉を聞き取る工夫】など 7 カテゴリー、〔患者に看護学生の思いを伝えるための工夫〕で【看護学生の話し方の工夫】【目線や表情の工夫】など 5 カテゴリーが抽出された。看護学生は工夫をしながら、臨地実習を重ねて患者とのコミュニケーションに慣れることで、患者とのコミュニケーションで感じる困難が少なくなることが示唆された。

キーワード COVID-19, 看護学実習, コミュニケーション, マスク, フィジカルディスタンス

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症 (coronavirus disease2019: COVID-19) は世界中で蔓延し、あらゆる国で人々に猛威を振るっている。この新型コロナウイルス感染症流行の影響で、手洗いや咳エチケットをする、「マスク」の着用、「三密」を避けるなど感染拡大防止のために人々の生活は新たな様式へと変化した<sup>1)</sup>。感染防御という点で、自己の身を守り、周囲に感染を広げないといった役割を果たすマスクの着用とフィジカルディスタンスを保つことは、一方で人と人とのコミュニケーションに一つの壁を作ったのではないかと考えられる。

看護基礎教育における臨地実習では、実習の日数・時間の短縮化、学内実習への変更、実習内容の変更といった新たな実習スタイルへの変革がせまられた<sup>2)</sup>。加えて、臨地での実習では、看護学生は感染予防対策としてマスクやゴーグル、フェイスシールドの着用、およびフィジカルディスタンスをとり、患者とのコミュニケーションを図ら

なければならず、これまでより困難を感じていたと推察する。

マスク着用によるコミュニケーションへの影響としては、しわがれ声、かすれ声といった聞き取りにくい音声<sup>3)</sup>、本来の笑顔の程度と比べて低く受け取られる<sup>4)</sup>、驚き・悲しみの表情を誤った表情として受け取られる<sup>5)</sup>、表情認知の着目点についてマスク非装着時は主に目や口で、マスク装着時は目や眉に着目するものが多く、マスク装着時は顔の下部が覆い隠されることで表情認知に大きな影響を及ぼす<sup>6)</sup>ことが既に指摘されている。コロナ禍で、看護学生もマスクを着用しての患者とのコミュニケーションで患者の言葉が聞こえにくく、発言された内容が聞き取れないことや、マスクで口元が覆い隠されていることにより顔の下半分の表情が見えず、感情の読み取りづらさを感じていたのではないかと考えられる。また、マスクを着用した看護師は忙しそうで少し話しにくかった、話せる雰囲気ではない、少し我慢してから気持ちや症状を伝えたというように、マスク着用が患者からみた看護師の印象にも影響しているとされる<sup>7)</sup>。さらに、口元がマスク着用により覆われたことによって、相手が受ける感情に影響を

<sup>1</sup> 金沢赤十字病院<sup>2</sup> 金沢大学附属病院<sup>3</sup> 金沢市立病院<sup>4</sup> 石川県立看護大学

\*ともに筆頭著者

§責任著者

及ぼしていると報告している<sup>8)</sup>。このように、マスクの着用は【表情】、【音声】、【情緒感受】に影響をもたらす、コミュニケーションを困難にさせる要因となっている。

さらに、フィジカルディスタンスを看護師が患者にとることは、「注目を引きつけることにより次に続く行為への合図を送る」「行動に手を添えることにより動きを支えると共に、動きに伴う恐れを支える」「手をかざしつつ患者の動きを待つ触れ方により患者の意思に添う」といった看護における触れることの意義<sup>9)</sup>を満たせない状況をつくる。コロナ禍では感染防止対策としてフィジカルディスタンスが必要とされ、看護学生は患者に触れることができず、コミュニケーションに影響を及ぼしていたと考えられる。

マスク着用によるコミュニケーションへの影響や、看護におけるタッチングの意義については検討がなされている。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延のもとで患者との接近が憚られる環境下での臨地実習におけるマスク着用、フィジカルディスタンスを考慮した看護学生のコミュニケーションに関する研究報告は見当たらなかった。

そこで、本研究では、コロナ禍におけるマスク着用とフィジカルディスタンスの影響からみた臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難と工夫を明らかにすることを目的とする。これらは、コロナ禍の臨地実習を経験した看護学生と新人看護師に関する基礎資料となり、どのような環境下にあっても効果的な看護基礎教育の実践に向けて貢献できると考えられる。

#### <用語の定義>

本研究では、以下のように用語の定義を行う。

コミュニケーションとは、人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと。言語・文字・その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行うこととする。

領域別実習とは、成人看護学実習、老年看護学実習、精神看護学実習、母性看護学実習、小児看護学実習を指す。成人看護学実習には経過別（急性期、慢性期）の実習がある。

臨地実習とは、病院での実習を指し、学内実習は含まない。

## 2. 方法

### 2.1 対象者

2020年度に領域別実習にて、マスク着用・フィ

ジカルディスタンスをとって患者とのコミュニケーションを行った看護学生81名を対象とした。

### 2.2 調査手順

無記名自記式のGoogleフォームを用いたWebアンケート調査を行った。本研究に関する説明会に参加した研究対象者81名に本研究の主旨、調査方法、実施に伴う倫理的配慮について口頭と研究依頼書にて一斉に説明を行い、任意の回答を依頼した。Googleフォームを用いたWebアンケートのURLの連絡方法は、研究依頼書にQRコードを記載し、QRコードから無記名自記式のアンケートに回答を求めた。

### 2.3 調査期間

調査期間は2021年8月20日～9月10日とした。

### 2.4 調査内容

#### (1) 臨地実習の状況

①領域別実習で臨地実習を経験した領域、②受持ち患者とのコミュニケーションで最も困難感をもった領域、③受持ち患者に実施したケアの回数とした。

#### (2) 臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難

研究者らのコロナ禍における臨地実習での患者とのコミュニケーションの経験と先行文献<sup>3,7,9,11)</sup>を参考に、コミュニケーションスキルとして【表情】に関するコミュニケーションスキル5項目、【音声】に関するコミュニケーションスキル2項目、【情緒感受】に関するコミュニケーションスキル3項目、【身体接触】に関するコミュニケーションスキル3項目の計13項目の質問項目を作成した。リッカート尺度は4件法とし、「4. 困難だった」～「1. 困難ではなかった」とした。

#### (3) 臨地実習で看護学生がとった患者とのコミュニケーションの工夫

①表情の読み取りづらさから患者の意思を読み取るために行っていた工夫、②看護学生のマスク着用で表情が隠れる中、患者へ思いを伝えるために行っていた工夫、③患者の声が「聞き取りにくい」と感じたときに行っていた工夫、④患者に話の内容が伝わりやすいように行っていた工夫、⑤患者の心理状態を理解するための工夫、⑥患者に「触れる」に変わって意識したコミュニケーションの工夫、⑦上記以外のコミュニケーションの工

夫を自由記述にて求めた。

## 2.5 分析方法

臨地実習の状況、コミュニケーションスキルに関する13項目については記述統計にて分析を行った。コミュニケーションスキル13項目は「困難だった」を4点、「どちらかといえば困難だった」を3点、「どちらかといえば困難ではなかった」を2点、「困難ではなかった」を1点とし、13項目の合計平均値、各項目の平均値を算出した。平均値が高いほど困難であると解釈した。

臨地実習で看護学生がとった患者とのコミュニケーションの工夫に関しては、自由記述のうち調査内容を表現している部分を抽出してコード化し、コードの意味内容の類似性によって分類、統合し、カテゴリーへと抽象度を上げて整理した。

## 2.6 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する石川県立看護大学倫理委員会の承認（看大第196号）を受けて実施した。研究対象者には、研究協力は自由意思であること、Webアンケートは無記名とし、匿名性の確保をすること、研究目的以外には使用しないことを十分に説明した。Webアンケートでの回答をもって本研究に同意が得られたとした。

## 3. 結果

対象者81名のうち、55名から回答が得られた（回収率67.9%）。そのうち、コミュニケーションスキル13項目の回答で無記入があった1名を除外し、54名を有効回答とした（有効回答率66.7%）。

### 3.1 臨地実習の状況（表1）

領域別実習で臨地実習を経験した回数は3回と4回が18名（33.3%）で多く、8割以上の看護学生が3回以上の臨地実習を行っていた。臨地実習を経験できた領域は、精神看護学実習が最も多く54名（100%）であった。患者とのコミュニケーションで最も困難感をもった領域は成人看護学実習慢性期（以後、慢性期実習）24名（44.4%）であった。受持ち患者に実施したケアの回数は0回が最も多く26名（48.1%）であった。

### 3.2 コロナ禍の臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難（表2）

(1) 臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケー

ションで感じた困難

臨地実習全体における平均値は  $2.39 \pm 0.26$ （平均値 $\pm$ 標準偏差）点、最大値2.81点、最小値1.96点であった。

最も困難と感じた項目は、[身体接触]「11. 身体に触れることにより患者の注目を引き付ける」 $2.81 \pm 0.99$ 点で、次いで [情緒感受]「8. 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう」 $2.69 \pm 0.70$ 点、[身体接触]「13. 患者の行動に手を添えることにより、動作に伴う不安や恐怖に寄り添う」 $2.61 \pm 0.98$ 点、[表情]「1. 自分の気持ちを表情でうまく表現する」 $2.57 \pm 0.72$ 点、[情緒感受]「9. 患者の感情や心理状態を敏感に感じ取る」 $2.57 \pm 0.69$ 点であった（表2）。

(2) 臨地実習の経験回数でみた看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難

臨地実習の経験回数別による項目全体の平均値では、2回群が  $2.57 \pm 0.46$ 点と最も高く、次いで3回群  $2.41 \pm 0.41$ 点、4回群  $2.37 \pm 0.45$ 点、5回群  $2.19 \pm 0.48$ 点の順であった。つまり、看護学生は、臨地実習の経験回数が少ないほど患者とのコミュニケーションに困難を感じる傾向にあった。

次に、項目別に臨地実習の経験回数の2回群と5回群とを比較した。2回群と5回群を選択した理由は、3、4回の群は経験した領域にばらつきがあり、2回群は1名の回答者以外は同じ領域を経験し、5回群は回答者全員が同じ領域を経験しており、実習領域によるコミュニケーションスキルへの影響を最小限にして比較ができると考えたからである。

表2に示すように、臨地実習の経験回数の比較では、5回群よりも2回群の平均値が高かった項目は12項目であった。一方で、2回群よりも5回群の平均値が高かった項目は [表情]「3. 患者の表情に合わせ、自分の表情を変える」の1項目であった。

2回群で最も困難を感じた項目は、[情緒感受]「8. 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう」 $3.20 \pm 0.79$ 点で、次いで [身体接触]「11. 身体に触れることにより患者の注目を引き付ける」 $2.80 \pm 1.14$ 点、[情緒感受]「9. 患者の感情や心理状態を敏感に感じ取る」 $2.80 \pm 0.79$ 点、[表情]「1. 自分の気持ちを表情でうまく表現する」 $2.70 \pm 0.67$ 点、[音声]「6. 自分の考えを発言で正しく伝える」 $2.60 \pm 1.07$ 点であった。5回群で困難を感じた項目の順は、[情緒感受]「9. 患

表1 コロナ禍の臨地実習の状況 n=54

臨地実習の状況		人数(%)
領域別実習で臨地実習を経験した回数	0回	0(0.0)
	1回	0(0.0)
	2回	10(18.6)
	3回	18(33.3)
	4回	18(33.3)
	5回	8(14.8)
	6回	0(0.0)
領域別実習で臨地実習を経験した領域 (複数回答可)	精神看護学実習	54(100.0)
	成人看護学実習慢性期	53(98.1)
	母性看護学実習	31(57.4)
	成人看護学実習急性期	30(55.6)
	小児看護学実習	17(31.5)
	老年看護学実習	0(0.0)
受持ち患者とのコミュニケーションに最も困難感をもった領域	成人看護学実習慢性期	24(44.4)
	精神看護学実習	19(35.2)
	成人看護学実習急性期	5(9.2)
	母性看護学実習	4(7.4)
	小児看護学実習	1(1.9)
	無回答	1(1.9)
受持ち患者に実施したケアの回数	0回	26(48.2)
	1回	12(22.2)
	2回以上	10(18.5)
	無回答	6(11.1)

者の感情や心理状態を敏感に感じ取る」2.50 ± 0.76点, [表情]「3. 患者の表情に合わせ, 自分の表情を変える」2.50 ± 0.53点, [情緒感受]「8. 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう」2.50 ± 0.53点, [身体接触]「11. 身体に触れることにより患者の注目を引き付ける」2.38 ± 1.19点, [表情]「1. 自分の気持ちを表情でうまく表現する」2.38 ± 1.06点の順であった(表2).

(3) 領域別でみた看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難

領域別による項目全体の平均値からみた看護学生が患者とのコミュニケーションで最も困難を感じた実習は, 精神看護学領域実習 2.44 ± 0.19点であった. 次いで, 慢性期実習 2.43 ± 0.36点, 母性看護学実習 2.33 ± 0.21点, 成人看護学実習急性期(以後, 急性期実習) 2.11 ± 0.32点であっ

た(表2).

同じ成人看護学実習領域で健康段階が異なる急性期実習と慢性期実習の比較では, [表情]「4. 自分の気持ちをしくさでうまく表現する」, [情緒感受]「8. 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう」以外は, 慢性期実習の方が平均値は高かった(表2).

### 3.3 コロナ禍における臨地実習で看護学生がとった患者とのコミュニケーションの工夫

403のコードから, 54のサブカテゴリー, 12のカテゴリーが抽出され, 2つの大カテゴリーに分類された. 以後, 大カテゴリーは〔 〕, カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉, 回答者の記述は「 」で示す.

コロナ禍における臨地実習で看護学生がとった

表2 コロナ禍の臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難

質問項目	全体 n=54	臨地実習の回数		最も困難をもった領域				
		2回 n=10	5回 n=8	急性 n=5	慢性 n=24	精神 n=19	母性 n=4	
表情								
1.自分の気持ちを表情でうまく表現する	2.57±0.72	2.70±0.67	2.38±1.06	2.40±0.89	2.75±0.74	2.47±0.70	2.25±0.50	
2.患者の気持ちを表情から正しく読み取る	2.31±0.84	2.50±1.18	2.38±0.74	2.00±0.71	2.29±0.86	2.42±0.90	2.00±0.82	
3.患者の表情に合わせ、自分の表情を変える	2.43±0.81	2.40±1.07	2.50±0.53	1.80±0.84	2.54±0.83	2.53±0.77	2.50±0.58	
4.自分の気持ちをしぐさでうまく表現する	1.96±0.78	2.40±0.70	1.63±0.52	2.00±1.00	1.83±0.87	2.16±0.60	2.00±0.82	
5.患者の気持ちをしぐさから正しく読み取る	2.11±0.79	2.20±0.92	2.00±0.76	1.80±0.84	1.92±0.83	2.32±0.75	2.50±0.58	
6.自分の考えを発言で正しく伝える	2.19±0.89	2.60±1.07	2.25±0.71	1.80±0.84	2.17±1.05	2.32±0.82	2.25±0.50	
7.患者の考えを発言から正しく読み取る	2.11±0.86	2.40±0.97	1.88±0.64	1.80±0.84	2.00±0.98	2.26±0.81	2.50±0.58	
情緒感受								
8.自分の感情や心理状態を正しく察してもらう	2.69±0.70	3.20±0.79	2.50±0.53	2.80±0.45	2.67±0.76	2.68±0.75	2.50±0.58	
9.患者の感情や心理状態を敏感に感じ取る	2.57±0.69	2.80±0.79	2.50±0.76	2.20±0.45	2.58±0.83	2.63±0.60	2.50±0.58	
10.患者の話を理解し、正しく間を取る	2.22±0.72	2.40±0.84	2.00±0.76	1.80±0.84	2.38±0.82	2.21±0.63	2.00±0.00	
身体接触								
11.身体に触れることにより患者の注目を引き付ける	2.81±0.99	2.80±1.14	2.38±1.19	2.40±0.55	2.96±1.04	2.79±1.03	2.50±1.00	
12.患者の行動に手を添えることにより、動きを支える	2.54±1.06	2.50±1.18	2.00±1.07	2.20±0.84	2.71±1.20	2.47±1.07	2.25±0.50	
13.患者の行動に手を添えることにより、動作に伴う不安や恐怖に寄り添う	2.61±0.98	2.50±1.27	2.13±0.99	2.40±0.55	2.79±1.06	2.47±1.02	2.50±1.00	
全体	2.39±0.26	2.57±0.46	2.19±0.48	2.11±0.32	2.43±0.36	2.44±0.19	2.33±0.21	

患者とのコミュニケーションでの工夫は、〔患者の意思・心理を理解するための工夫〕、〔患者に看護学生の思いを伝えるための工夫〕の2つの大カテゴリーに分類された。

(1) 〔患者の意思・心理を理解するための工夫〕  
(表3)

この大カテゴリーは、患者の声や目元、行動の変化を観察することや患者が意思表示しやすいよ

うなアプローチをすることでマスク着用・フィジカルディスタンスの下でも患者の思いを知ることを示す。これは以下の7つのカテゴリーから構成された。

① 【患者の言語音から気持ちを推察する工夫】

このカテゴリーは、患者の声のトーンや大きさ、話し方、声色を観察し、患者の心持ちを推しはかる工夫を示す。具体的な記述としては、「声のトー

表3 患者の意思・心理を理解するための工夫

カテゴリー	サブカテゴリー
患者の言語音から気持ちを推察する工夫	患者の声のトーンの変化を観察する 患者の声の大きさを観察する 患者の話し方を観察する 患者の声色を観察する
患者の面持ちを読み取る工夫	患者の目をしっかり見て話す 患者の目線に着目する 患者の目元の表情に着目する 患者の表情を観察する
患者の意思を言葉で伝えてもらう工夫	看護学生の表情や声質を変化させる 患者が容易に意思表示を行えるよう学生が工夫して質問する 患者の発言内容から意思を読み取る
信頼関係を構築する工夫	話しやすい雰囲気を作るための声かけをする 共感的に関わる
患者の様子から読み取る工夫	患者の動作を観察する 患者の手の動きを観察する 患者のジェスチャーを観察する 患者の雰囲気を観察する 身体症状から読み取る 普段や前日との違いから読み取る
患者の話した内容と看護学生の解釈が一致しているか確認する工夫	患者の発言を繰り返して確認する 看護学生の解釈が正確であるか確認する 会話の最後に最終確認をする 聞き取れなかった患者の発言内容を推察する カルテからの情報収集や看護師・教員に相談して理解する
患者の言葉を聞き取る工夫	患者の話に意識を集中する 患者の発言が聞こえる距離に近づく 聞き取れなかった内容を再度聞く

ンから気持ちを察する.」「声の大きさの変化を慎重に観察する.」「話し方から気持ちを察する.」「声色から気持ちを察する.」があった.

#### ②【患者の面持ちを読み取る工夫】

このカテゴリーは、患者の目をしっかり見て話すことや目線・目元の表情に着目すること、患者の表情を観察することで患者の気持ちを推量する工夫を示す. 具体的な記述としては、「しっかり目をみて話す.」「目元の表情などにも注目してコミュニケーションをとった.」「目線から思いを汲み取った.」「表情を注意深く観察した.」があった.

#### ③【患者の意思を言葉で伝えてもらう工夫】

このカテゴリーは、看護学生の表情や声質を変化させることや患者が容易に意思表出を行えるよう看護学生が工夫して質問し、発言内容から意思を汲み取る工夫を示す. 具体的な記述としては、「自分の表情をもっと豊かにして、相手も表現しやすくする.」「できるだけ患者さんから話を聞くことが出来るようオープンクエスチョンを心掛けた.」「患者さんの発言内容からできるだけ意思を汲み取れるようにした.」があった.

#### ④【信頼関係を構築する工夫】

このカテゴリーは、患者が話しやすい雰囲気を作るための声かけをし、共感的に関わることで信頼関係を築く工夫を示す. 具体的な記述としては、「最初から気持ちを聞きだそうとするのではなく、世間話をしながら、自然と気持ちを話してもらるようにした.」「思いに共感することでより詳しい思いを聞き出す.」があった.

#### ⑤【患者の様子から読み取る工夫】

このカテゴリーは、患者の動作や手の動き、ジェスチャー、雰囲気、身体症状に注目し、普段との違いから患者の意思・心理を推しはかる工夫を示す. 具体的な記述としては、「会話中の動作を注意深く観察した.」「雰囲気に注意して聞いていた.」「前日との話のテンポの違いや会話の多さなどを比較していた.」「酸素療法を行っている患者さんで、表情からは息苦しさが読み取りづらいので、話し方や嘔声、チアノーゼの有無など、より他の観察ポイントに集中した.」があった.

#### ⑥【患者の話した内容と看護学生の解釈が一致しているか確認する工夫】

このカテゴリーは、患者の発言を繰り返し患者本人に確認を取ることや、聞き取れなかった発言内容を推察し患者へ確認する、カルテからの情報収集や看護師・教員に相談して患者を理解する工夫を示す. 具体的な記述としては、「患者さんの

言葉を繰り返して、自分の聞き取った言葉が正しいか、解釈が合っているか確認した.」「聞こえた部分から言いたいことを推察して、自分の推測があっているか確認した.」「看護師や電子カルテを情報統合して、理解しようとした.」があった.

#### ⑦【患者の言葉を聞き取る工夫】

このカテゴリーは、患者の話に意識を集中し、発言が聞こえる距離に近づくことや、聞き取れなかった内容を再度聞くことで患者の言葉を正確に聞いてわかる工夫を示す. 具体的な記述としては、「とにかく耳を澄ます.」「距離を保ちながらも、耳を近づけた.」「聞こえなかった時はもう一度聞いていた.」があった.

#### (2) [患者に看護学生の思いを伝えるための工夫] (表4)

この大カテゴリーは、看護学生が声や表情、傾聴時の態度の工夫をすることや患者と信頼関係を作る工夫をすることで、マスク着用・フィジカルディスタンス下においても看護学生の意思や気持ちを患者に伝える工夫を示す. これは以下の5つのカテゴリーから構成された.

#### ①【看護学生の話し方の工夫】

このカテゴリーは、看護学生が声のトーンに変化をつけ、大きな声で、はっきり、ゆっくり、患者のペースに合わせてながら優しく話すことで看護学生の思いをより伝えやすくする工夫を示す. 具体的な記述としては、「声のトーンに変化をつける.」「マスクで声がかもらないようにし、少し大きめの声で話した.」「はっきり話すようにした.」「優しく話しかけることをいつも以上に意識した.」があった.

#### ②【目線や表情の工夫】

このカテゴリーは、看護学生が目や眉、表情を意識し、マスクでわかりづらい表情を伝えることが出来るよう工夫することや、患者の目を見て話し、目線を合わせることでより看護学生の思いを伝えやすくする工夫を示す. 具体的な記述としては、「目元を意識する」「より大袈裟に表情を作る.」「相手の目を見て話すように意識した.」「目線をしっかりあわせることを普段より意識した.」があった.

#### ③【患者にわかりやすく確実に伝える工夫】

このカテゴリーは、看護学生が専門用語を使用せず患者にとってわかりやすい言葉で簡潔に伝えることや質問内容を工夫し、時には媒体を用いて伝え、看護学生の思いが患者に伝わっているか確認することで、患者にわかりやすく確実に伝える

表4 患者に看護学生の思いを伝えるための工夫

カテゴリー	サブカテゴリー
看護学生の話し方の工夫	声のトーンに変化をつける 大きな声で話す 看護学生がはっきり話す ゆっくり話す 患者のペースに合わせる 看護学生が優しく話すことを意識する
目線や表情の工夫	目で感情を伝える 眉毛の動きを意識する 表情を豊かにする 患者の目を見て話す 患者と目線を合わせる
患者にわかりやすく確実に伝える工夫	わかりやすい言葉を使用する 簡潔な文章で伝える 質問方法を工夫する 媒体を用いて伝える 看護学生の思いが伝わっているか確認する
会話中の姿勢の工夫	意識的にうなづく 相槌を大きくする オーバーリアクションをする 聞く態度を意識する 身体動作を活用する 話を聞く適切な場所を選択する
患者との心の距離を近づける工夫	コミュニケーションをとる機会をつくる 信頼を得るために自分から心を開く 患者を気遣う声かけをする タッチングを行う 多職種から情報収集する

工夫を示す。具体的な記述としては、「患者さんがわかりやすいような言葉選びや話し方をする。」「端的な文章で、わかりやすく伝わるように意識していた。」「クローズドクエスチョンで会話を行うなど、わかりやすい会話をした。」「文字や絵を用いて話す。」があった。

④【会話中の姿勢の工夫】

このカテゴリーは、看護学生が患者との会話で意識的にうなづく、相槌やオーバーリアクション、聞く態度、身体動作を意識し、話を聞く適切な場所を選択することで看護学生の思いをより伝えや

すくする工夫を示す。具体的な記述としては、「うなづくなどの動作を意識的に行った。」「笑うときは声を出したり、オーバーに笑うなどして一緒に居て楽しいことを伝えていた。」「相手の気持ちに寄り添う場面は、目と自分の姿勢で伝えられるように頑張っていた。」「きちんとゆっくり話をしたいときは、静かな場所で落ち着いた話をしていった。」があった。

⑤【患者との心の距離を近づける工夫】

このカテゴリーは、看護学生が患者とのコミュニケーションを取る機会をつくり、患者から信頼

を得るために自分から心を開き、患者を気遣う声かけやタッチングを行い、多職種からも情報収集することで患者により近づく工夫を示す。具体的な記述としては、「訪問時間を短くしつつ、訪問回数をなるべく多くした。」「名札の自分の顔を見せてマスクの下はこのような顔と伝えていた。」「身体に触れるなどして、安心を感じてもらえるようにした。」「理学療法士など患者に関わる多職種からも話を聞くことを心掛けた。」があった。

#### 4. 考察

本研究の回答者の傾向について、領域別実習6領域のうち、臨地実習を行えた回数が3領域以上の看護学生が8割であった。2020年10月時点での文科省による「新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等の実施状況調査」<sup>2)</sup>で、臨地実習の代替措置を「すべての実習科目で実施した」大学は289課程中116課程(40.1%)であったと報告されている。このような臨地での実習が実施しにくい状況で、回答者の8割の看護学生が3領域以上の臨地実習を経験することができた。しかし、受持ち患者への看護ケアの経験回数をみると0回が最も多く、最も困難を感じた項目は「身体接触」「11.身体に触れることにより患者の注目を引き付ける」であったことから、主な実習内容が対話によるコミュニケーションとなっていたと推測できる。このような状況下において、看護学生は臨地実習に困難を感じつつも、受持ち患者との精神的距離を縮め、信頼関係の形成に至るべく、コミュニケーションにおける工夫を様々な実施していたことが自由記述から読み取れた。これらを踏まえて、マスク着用、フィジカルディスタンスによる影響からみたコロナ禍の臨地実習におけるコミュニケーションの特徴と今後の看護基礎教育における臨地実習への示唆について考察する。

##### 4.1 コロナ禍の臨地実習におけるコミュニケーションの特徴

###### (1) マスク着用による影響

多くの看護学生は、相手の意図を汲み取り、受け入れることはできるものの、自分の考えを相手に正しく伝えることを苦手としている<sup>12)</sup>とされる。実習回数が2回群では、[表情]「1.自分の気持ちを表情でうまく表現する」、[音声]「6.自分の考えを発言で正しく伝える」、[情緒感受]「8.自分の感情や心理状態を正しく察してもら

う」といった自己表現に関するコミュニケーションスキルを困難に感じていた。しかし、これらは実習回数が5回群では困難感が低下していた。これは、看護学生がマスクを着用しながらも言葉や目線、表情などを使った自己表現の工夫、【看護学生の話し方の工夫】【目線や表情の工夫】【会話中の姿勢の工夫】を行ったからと考えられる。このようにコロナ禍でマスクを着用しなければいけない状況下であっても、臨地実習を重ね、受持ち患者と接する機会が増えてコミュニケーションに慣れることで、患者とのコミュニケーションで感じる困難が少なくなったと考えられる。

一方で、実習回数が2回群よりも5回群で「3.患者の表情に合わせ、自分の表情を変える」が困難感を上回っていた。工藤ら<sup>13)</sup>は、看護学生は実習当初には患者の言動の意味を断定する傾向を示すが、徐々に患者の言動の意味や自らの言動に与える影響を推察できるようになると述べ、加えて、看護学生は実習中に患者とともに過ごすことにより、患者を理解したいという思いが高まる<sup>12)</sup>とされている。このことから、臨地実習の経験回数を重ねることで、看護学生は多角的な視点で患者を捉え、患者とともに過ごすにつれて患者を正確に深く理解したいという気持ちになり困難感が高まったと考えられる。

###### (2) フィジカルディスタンスによる影響

看護学生や新人看護師は患者とのコミュニケーションが苦手とされ、患者とのコミュニケーションをとる足掛かりとしてのタッチに脈拍測定やマッサージがあげられる<sup>14)</sup>。本研究では受持ち患者へのケアの経験回数をみると0回が最も多く、フィジカルディスタンスによって患者に触れる機会が著しく制限されていた。看護師の触れる意味には、言葉の伝わりにくさを補う合図としての触れる<sup>15)</sup>、さらには看護師の手で患者の身体を触れることで、ぬくもりからその人を感じ、患者と心が通じる<sup>16)</sup>とされている。看護学生が患者へのケアをとおして触れる行為は、人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うコミュニケーションには欠かせない。故に、身体接触に関するコミュニケーションスキルを困難に感じる傾向にあったと考えられる。

一方で、看護学生はフィジカルディスタンスを取りながら【信頼関係を構築する工夫】【患者との心の距離を近づける工夫】として、平常よりも言語化をはかり目元の表情をオーバーにして、患者とのコミュニケーションを円滑にしようとして

いた。波平ら<sup>17)</sup>は、身体接触というのは言葉では表せない感情を示すとし、コロナ禍のフィジカルディスタンスによって人間関係を保つという状況で磨かれた部分があるはずと述べ、具体的には離れたところにいる人に言葉を伝えるために、しっかりと発音し、抑揚をつけ、相手が確実にそう受け取るであろう言葉を選び取ることをあげている。本研究結果はこの指摘と合致しており、看護学生はフィジカルディスタンスを取る中で、患者とのコミュニケーションを円滑にし、信頼関係を構築しようと様々な工夫を重ね、コミュニケーションスキルの幅を広げるといって磨きをかけていたといえる。

#### 4.2 看護基礎教育における臨地実習への示唆

奈良<sup>18)</sup>は、看護学生のコミュニケーション技術評価項目の比較から学内演習より臨地実習による効果が大きいと報告している。また、シミュレーションにはおおよその答えがあり、臨床ではその判断が合っているか看護師ですらわからない状況で患者の反応を探りながら実践を行うとされている<sup>19)</sup>。これらから患者を理解し寄り添うためのコミュニケーション能力を培うためには臨地実習は不可欠であり、コロナ禍であっても臨地実習での経験回数を重ね、患者へのケアを経験することが必要である。近未来に新興感染症による感染が拡大した場合において、看護教員は看護学生の感染防止対策を取りながら、臨地実習を実施できるよう、患者へのケアを行うことや患者に触れるという行為を行えるように実習施設と調整を図っていく必要がある。

さらに、COVID-19が蔓延している中で、看護学生はマスクを着用しフィジカルディスタンスを取りながら、受持ち患者を理解しようとコミュニケーションの工夫を行っていた。看護学生はこれまでの経験を総動員しながら、工夫を繰り返していたと推測する。このように看護学生が持つ力、自らできることを考える力があり、未曾有の状況下での臨地実習に対して看護学生と看護教員がともに工夫しながら臨地実習を展開していく必要がある。

#### 4.3 本研究の限界と課題

本研究結果は、COVID-19が感染拡大してから初めて実施された領域別実習での看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難と工夫である。官公庁の方針や日本看護系大学協議会等の支

援活動により、3年が経過した臨地実習では、看護学生は感染防止対策を取りながら患者ケアが実施できる状況となった。今後もマスクの着用は継続されるため、患者と看護学生とが互いに正しく表情認知できるための工夫とその効果を明らかにしていきたい。

本研究は、研究対象者が一大学の看護学生であり、研究結果は一大学と実習施設の感染防止対策の考え方に限定される可能性がある。

### 5. 結論

本研究は、コロナ禍における臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じた困難と工夫を明らかにすることを目的に、2020年度の領域別実習後の看護学生81名を対象にGoogleフォームを用いたWebでの無記名自記式質問調査を行った。54名の有効回答から以下の結論を得た。

- (1) 受持ち患者への看護ケアの経験回数は0回が最も多く、最も困難を感じた項目は「身体接触」「11. 身体に触れることにより患者の注目を引き付ける」であった。
- (2) コロナ禍における臨地実習で看護学生がとった患者とのコミュニケーションでの工夫は、「患者の意思・心理を理解するための工夫」、「患者に看護学生の思いを伝えるための工夫」の2つの大カテゴリーに分類された。
- (3) 臨地実習の経験回数が5回群よりも2回群で困難を感じたコミュニケーションスキルは13項目中12項目であった。つまり、看護学生は、臨地実習の経験を重ねて患者とのコミュニケーションに慣れることで、患者とのコミュニケーションで感じる困難は少なくなる。

### 謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に心より感謝し厚く御礼を申し上げます。

### 利益相反

なし

### 引用文献

- 1) 厚生労働省：健康や医療相談の情報 新型コロナウイルス感染症予防のために。  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kenkou-iryousoudan.html#h2\\_1](https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kenkou-iryousoudan.html#h2_1) (accessed 2021/10/30)
- 2) 文部科学省：新型コロナウイルス感染症下における

- 看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告。  
[https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt\\_igaku-000015851\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf)(accessed 2021/11/05)
- 3)北島万裕子, 加悦美恵, 飯野矢住代: マスクを着用した看護師の声はどのような音として聞こえているのか. 日本看護技術学会誌, 11(2), 48-54, 2012.
  - 4)辻村祐香, 西村さなえ, 飯島綾香, 他1名: サージカルマスク着用の有無による笑顔度の比較. 看護総合科学研究会誌, 19(2), 3-9, 2020.
  - 5)増田希和, 大野宏明: 素顔とマスク使用時における表情認知と情動的表情認知の比較. 作業療法おかやま, 22, 26-32, 2013.
  - 6)田辺かおる, 西沢義子: 医療者のマスク装着による表情認知の実態. 日本看護研究学会雑誌, 32(3), 285, 2009.
  - 7)堀めぐみ, 佐々木八重, 森脇三重子: ICUに勤務する看護婦のマスク常用が患者に及ぼす影響—識別・イメージ・コミュニケーション・情緒の視点から—. 日本看護学会論文集成人看護I, 31, 92-94, 2000.
  - 8)岸本桂子, 羽坂亜希子, 山浦克典, 他1名: 薬局薬剤師のマスク着用による表情の視覚的情報は援助要請者の抱く信頼感に影響するのか?. 薬学雑誌, 136(10), 1401-1413, 2016.
  - 9)川西美佐: 看護技術における「触れる」ことの意義—整形外科看護師の生活行動援助技術を身体性の観点から探求して—. 日本赤十字広島看護大学紀要, 5, 11-19, 2005.
  - 10)藤本学, 大坊郁夫: コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15(3), 347-361, 2007.
  - 11)廣瀬春次, 太田友子, 井上真奈美, 他1名: 看護学生のコミュニケーション行動に関する研究. 山口県立大学学術情報, 4, 47-53, 2011.
  - 12)島村美香, 藤本学, 幸史子, 小山記代子: 統合実習が看護学生の基本的コミュニケーション・スキルに及ぼす影響—ENDCOREsを用いたスキル・タイプの検討—. 九州看護福祉大学紀要, 20(1), 53-63, 2019.
  - 13)工藤千賀子, 渡部菜穂子, 阿部テル子: 看護学部1年時の初回臨地実習時のコミュニケーションにおける関心事—実習場面の再構成記録による分析—. 弘前学院大学看護紀要, 10, 1-11, 2015.
  - 14)川島みどり: 触れる・癒やす・あいだをつなぐ手—TE-ARTE学宣言, 川島みどり編, 触れる・癒やす・あいだをつなぐ手—TE-ARTE学入門(第1版). 看護の科学社, 7-8, 東京, 2011.
  - 15)牛尾陽子: ICUにおける看護師の「触れること」. 日本看護科学会誌, 42, 204-211, 2022.
  - 16)石川倫子: 中堅看護師における急性期意識障害患者への看護ケアの意味. 看護実践学会誌, 23(1), 13-23, 2011.
  - 17)波平恵美子, 田辺けい子: Nursing Todayブックレット・10「コロナ」と「看護」と「触れること」—COVID-19 and Nursing(第1版). 日本看護協会出版会, 28-37, 東京, 2021.
  - 18)奈良知子: 看護学生のコミュニケーション技術教育の効果と問題点. 弘前医療福祉大学, 1(1), 59-66, 2009.
  - 19)三浦友里子: COVID-19感染拡大における看護教育における官公庁等の動向と学生が認識した臨地実習での学習経験. 聖路加看護学会誌, 24(2), 51-54, 2021.

## Challenges and Responses Made by Nursing Students in Communicating with Patients during Practicum amid COVID-19: The Effects of Mask-Wearing and Physical Distancing

Rumi IKEDA, Saki IMAI, Rintaro KISHI, Tomoyo NAKASHIMA,  
Noriko ISHIKAWA

### Abstract

This study aims to elucidate the challenges that nursing students faced when communicating with patients during their practicum amid the COVID-19 pandemic and their efforts to overcome such difficulties. An anonymous self-administered questionnaire survey was conducted online targeting nursing students after their area-specific practicum in FY2020. The response rate was 55 out of 81 (67.9%), with 54 providing valid responses. Results showed that the most difficult item was “attracting the patient’s attention by touching them.” The group with only two practicum sessions felt difficulties in 12 out of 13 items compared to the group with five practicum sessions. The efforts made by nursing students to understand patients were classified under seven categories, such as “effort to understand the patient’s intentions and psychology” and “effort to understand the patient’s words.” Similarly, efforts to convey the nursing student’s thoughts to patients were classified under five categories, including “efforts to improve the nursing students’ way of speaking” and “efforts to improve eye contact and facial expressions.” The results suggest that as nursing students repeatedly practice and become accustomed to making such efforts to communicate with patients, it becomes less difficult to communicate with patients.

Keywords COVID-19, Nursing training, communication, mask, social distancing